

日本昔話「米ぶき粟ぶき」にみる関係性

千野 美和子

I、初めに

主人公の継子が継母にいじめられ、困難な課題を与えられるが、様々な援助者のおかげで、無事課題をすることができ、最後は幸せな結婚をする昔話がある。継子が登場する昔話を継子話といい、世界中に広く伝わる話であるが、特に日本では著しく発達した昔話であるという（稲田、1994）。その理由については関（1978）の指摘がある。日本において継子話に分類される昔話は多岐にわたり、継子は男子の場合もあり、物語の展開もさまざまである。世界に共通した典型的な継子話の場合、多くの継子は娘であり、その上に継母の連れ子である実の娘が加わる場合が多く、継母と継子の対立のみならず、実子も物語の重要な役割を担っている。これらの話を継母と継子の親と子の関係の問題と考えることもできるが、そこに実子を加えた三者の関係性の問題と理解することもできる。

本論文では、日本昔話の継子話「米ぶき粟ぶき」を取り上げ、この昔話をタイプと類話から検討し、グリムメルヘン、他の日本昔話の継子話と比較しながら、継子話の登場人物の関係性について考察したい。昔話の母親が継母であることについて、河合（1982）をはじめとして、さまざまな心理学的考察がある。また、この昔話について、山口（2009）は日本独自の存在である「山姥」との関わりから心理学的考察を行なっている。これら諸家の考察を踏まえつつ、少し異なる視点から、この物語について考えていきたい。

Ⅱ、昔話のあらすじ

昔、米ぶきと栗ぶきという二人の姉妹があった。米ぶきは先の母の子どもで、栗ぶきは後の母の子どもであった。ある日、継母は二人を栗拾いにやり、米ぶきには破れ袋を、栗ぶきにはよい袋をもたせた。栗ぶきの袋はじきに一杯になったが、米ぶきの袋は少しもたまらなかつた。栗ぶきは米ぶきに、袋に穴があいているからお堂の爺に繕ってもらうようにすすめた。米ぶきはそのようにして、袋は一杯になった。

そのうち日が暮れて、山道に迷っていると、一軒家があり、そこの婆に一晩泊めてもらうように頼んだ。そこで、婆はふたりに、頭のしらみをとるように頼んだ。栗ぶきはとがげみたいな大きなしらみを恐ろしがってとらなかつたが、米ぶきは火ばしを焼いてとって殺した。婆は、米ぶきには小さな宝箱を、栗ぶきには豆炒りをやった。帰る途中、二人を捕まえて食おうとやってきた追手に、栗ぶきはもらった豆炒りを投げて、山と川を出して、やっとのことで家に帰った。帰ると、継母は、栗をゆで、栗ぶきにはよい栗を、米ぶきには虫喰いの栗ばかりをやつたが、母親のすきをみて、栗ぶきにはよい栗を米ぶきに転がしてやった。

そのうち町に祭りがあつた。継母は米ぶきに、目籠で据風呂に水を汲んで、栗十石搗いておくよう仕事を言いつけて、栗ぶきと祭りに出かけた。米ぶきは、旅の和尚や、雀の手助けを得て、仕事をする事ができた。隣の娘が祭りに行こうと誘いに来た。山婆からももらった宝箱に入っていた晴れ着をきて、祭りに出かけた。栗ぶきは祭りに来ている米ぶきを見つけ、母親に言ったが、母親はとりあわない。米ぶきは栗ぶきにまんじゅうを投げたので、栗ぶきは「まんじゅうくれたから、姉さまだよ」と言うが、母親は人違いだときかない。米ぶきが先に帰って働いていると、祭りから帰ってきた栗ぶきは姉とそっくりな人が来ていて、まんじゅうを投げってくれたと告げる。

そういつているところへ、米ぶきを嫁にほしいという人がやって来た。継母は栗ぶきの方をもらって下さいと頼んだが、その人は米ぶきをほしいとききれなかつた。いよいよ米ぶきは嫁に行くことになった。宝箱には嫁入り衣装が

入っていて、それを着て駕籠に乗って嫁に行った。粟ぶきと母親はそれをうらやましがって、母親は粟ぶきを臼に乗せて田の畔を引っ張っていった。臼は転がり、二人は田の中に入り、水に落ちて貝になってしまった。

(関啓吾編『一寸法師・さるかに合戦・浦島太郎 日本の昔ばなし(Ⅲ)』より要約)

Ⅲ、この昔話のタイプについて

この昔話は、『日本昔話大成』では、「本格昔話」の中の、「継子譚」に分類される205A「米福栗福」の類話として収録されている。関(1978)は継子譚として集めた話について「『継母』と『継娘』と称する少女との葛藤を主題とした一群の話を集めたが、国際的意味における継母とは米福糠福、手なし娘などきわめて少数である。西欧の昔話で、魔女、悪女として語られるものが、何故か我が国の昔話ではほとんど継母になっている。比較検討すべき重要な問題であろう」と指摘している。205Aについては「ほぼ完全な二つのタイプの複合型で後半はシンデレラ型である」とし、この物語がそのまま「則シンデレラではない」ことを主張している。

関のいう二つのタイプとは以下のものである(関、1978)。

前半のタイプ

- 1、継母が継子には破れ袋を、実子にはよい袋をもたせ栗(椎)拾いにやる。
- 2、山で日が暮れ、姉妹は山姥の家に泊まる。
- 3、山姥がしらみを取らせるが、継子は取ってやり実子は取らない。
- 4、継子は着物の入った葛籠を、実子は蛙その他の汚い物の入った葛籠をもらって帰る。

これは、アールネ・トンプソンの昔話の分類ではAT480「泉のそばの糸紡ぎ女たち、親切な娘と不親切な娘」にあたる。

後半のタイプ(いわゆるシンデレラ型)

- 1、継母と実子は祭り(芝居)を見に行く。

- 2、継子は留守番をして籠で水汲み、稗、粟と米と混ぜたのを選び分ける等の難題を課せられる。
- 3、友達、僧、雀が来て援助する。
- 4、継子は山姥にもらった着物を着て友達と祭り見物に行く。
- 5、妹に発見される。または姉が物を投げつける。
- 6、継子は祭りで会った若者の嫁にもらわれる。
- 7、妹も嫁に行きたく、白にのって行き、川に落ちて親子は田螺（貝）になる。これは、7を除き、AT510A「シンデレラといぐさの頭巾」にあたる。

また、稲田（1988）はこの205Aを「むかし語り」の「Ⅷ継子話」の174「米福・粟福」のタイプとして分類している。このタイプは次のモチーフからなる。

- 1、継母が継子の粟福には穴のあいた袋、実子の米福にはよい袋を持たせて木の実拾いにやると、米福は袋いっぱいになり先に帰る。
- 2、粟福の亡母が現れて木の実を拾い何でも出る袋をくれたので、粟福は帰ってくる。
- 3、継母が粟福に、ざるで水を汲み粟千石を搗け、と命じて米福だけを連れて祭り見物に行くが、粟福は婆と雀の援助をえて仕事をすませる。
- 4、粟福は亡母のくれた袋から出した晴着を着て祭りにいき米福にものを投げつけるが、継母はそれが粟福だと信じない。
- 5、長者が祭りでみそめた粟福をもらいにくると、継母は粟福の髪をけなし米福を押しつけようとするが、粟福がもらわれていく。
- 6、継母が、嘆く米福を白に乗せてまわり、二人は田にころげこんでたにしになる。

稲田は、このタイプについて対応するATのタイプはないが、参照タイプとして、AT510をあげる。

本論で取り上げる昔話「米ぶき粟ぶき」は、関の分類では、「米福粟福」に分類され、稲田の分類では、「米福・粟福」に分類される（分類名は同じだが、継子と実子の名前が逆になっている）。この話は、関の前半のタイプのモチーフの4、また、稲田のタイプのモチーフ1、2が異なる以外は、ほぼすべてのモ

チーフを持っており、両タイプの典型的な昔話であることがわかる。関のいう後半のタイプと稲田のモチーフの3、4、5、6はほぼ同一であり、最後のモチーフを除き、いわゆるシンデレラ型(AT510)の物語であることがわかる。しかし、関が二つのタイプの複合型であると指摘しているように、この昔話において前半(関のいう前半のタイプ)の話は、単にシンデレラ型の後半の話につなげるための一つのエピソード(たとえば、祭りに行くための着物を出すための理由)にとどまらず、この物語に他の類話にはない独特の意味を付与していると思われる。

この昔話の前半は、関の分類では212「栗拾い」に、稲田の分類では、タイプ172「継子の木の実拾い」に独立した一つのタイプとしてあげられている。稲田のタイプのモチーフをあげる。

- 1、継母が継子には穴のあいた袋、実子にはよい袋を持たせて木の実拾いにやると、実子はすぐに袋いっぱいになり先に帰る。
- 2、継子が山姥に泊めてもらうと、山姥は頭のしらみを取らせてお礼に大小二つの箱を選ばせるので、継子は小さい箱をもらって帰る。
- 3、継子は山姥に言われたとおり帰って箱をあけると、宝物が出てくる。
- 4、わけを知った継母は実子に穴のあいた袋を持たせて二人を木の実拾いにやり、継子はすぐ袋いっぱいになり先に帰る。
- 5、実子が山姥に泊めてもらうと、山姥は頭のしらみを取らせてお礼に大小二つの箱を選ばせるので、実子は大きい箱をもらって帰る。
- 6、実子は山姥の注意を無視して帰る途中で箱をあけ、出てきた化け物にひどいめに会う。

稲田はこのタイプについて、発端のモチーフは、継子話の導入的役割を果たし「米福・粟福」などのタイプとして展開することが多いことを指摘しつつ、ここに一つの独立したタイプとして取り上げたことについて、この導入部について異郷の山姥の世界を舞台とするもので、独自性の強いものと認めたことを述べる。

この稲田のあげたタイプ172「継子の木の実拾い」と関のあげた「米福粟福」

の前半のタイプはかなり近いものであり、どちらのタイプでも、山姥の家に泊まり、姉妹それぞれにおきる出来事は同じである。しかし、稲田のモチーフでは、姉の山姥の家での出来事をきいて、姉の手に入れたものを、妹も手に入れるために山姥の所へ行くことがモチーフとして構成されている。稲田のモチーフは、姉妹のそれぞれの行為が対比される展開になっている。それに対し、関のモチーフでは最後の結末は稲田とほぼ同じであるが、姉妹二人と一緒に山姥の家に泊まり、そこで二人が体験した話であることが強調される。その意味で、本論で取り上げる昔話は、稲田のタイプ 174、またはタイプ 172 と 174 の複合型と見るより、関の述べた二つのタイプの複合型 (205A) タイプと考えるほうがよいように思われる。ただし、稲田がこれらのモチーフを持つ話を異郷の山姥の世界を舞台とする独自性を強調して 1 つのタイプとしたことは、この昔話の前半の重要性を指摘したものと思われる。

さて、関の 205A のタイプにそって、「米ぶき粟ぶき」の物語をみると、前半のモチーフ 4 の後半が異なることがわかる。すなわちモチーフ 4 では、「継子は着物の入った葛籠を、実子は蛙その他の汚い物の入った葛籠をもらって帰る。」である。このモチーフは、継子と実子のもらったものが対比されており、このモチーフのみ稲田のタイプと同じく対比型となっている。このように二人の行為や結果が対照的に述べられ対比される昔話は、後述するようにヨーロッパの継子話の典型であり、日本昔話にも同様の展開を示す昔話もある。リュウティ (Rüthi, 1975) はこのような昔話を「模倣の失敗」と呼び、メルヘンで好まれるコントラストの一つであるという。ところが、この「米ぶき粟ぶき」では、そのような対比型になっておらず、そのことが、この物語に独特の意味内容をもたせることになる。

IV、継子話についてグリムメルヘンから考える

まず、継子話について理解しておきたい。ここでは、グリムメルヘンから継子と継母の話を取りあげ、継子話の特徴について検討する (註 1)。

継母と継子の登場する物語には、継母継子間の二人の関係を述べた「白雪ひめ」、「ほんとのほなよめ」、継母と幼い兄妹の継子の関係を述べた「ヘンゼルとグレーテル」、「小ひつじと小さい魚」、そして、継母と継子に加えて実子が登場し、三人の関係を述べた「森の中の三人のこびと」、「ホレおばさん」、「恋人ローラント」、その三人に加えて、継子の兄が登場する「兄さんと妹」、「白いはなよめと黒いはなよめ」、また、実子が一人でなく二人登場する「灰かぶり」がある。幼い兄妹を除き、これらの主人公はすべて女性である。そのほかに、少し位置づけが異なる昔話として「ねずの木の話」がある、これは主人公の継子が男子であり、継子を殺害した継母が、鳥になった継子に復讐されて殺される話である。

継子話といっても、純粋に継母継子二人の関係の物語は少なく、二人に他の家族がからんで物語が展開する話のほうが多い。また、継母と継子との関係は、継母による継子への一方的ないじめ、迫害である。その内容は、困難な仕事を言いつけることから、追い出す、殺すまで幅があるが、脅威を与える母親像として登場する。そして、どの話の主人公も、様々な脅威を受けながらもそれを退けたり、打ち勝ったりして、最後には幸せに暮らす。

ここでは、実子の登場する昔話、特に実子の役割がよく表現されていると思われる「森の中の三人のこびと」を中心に取り上げ、実子の役割と3人の関係について考えていきたい。

「森の中の三人のこびと」の話のすじは次のようなものである。継母は、継子が美しく、実子はみにくいので、やきもちをやき、いじめた。冬に、継子は、継母の言いつけで、紙の服を着て硬いパンを一切れもって苺を取りに行く。森で出会った小人に継子は親切にしたおかげで、小人から祝福を受け、小人のいうとおり、家のうらの雪をはくと雪の中から苺がでてきた。それをきいた実子はうらやましがり、自分も森に行きたがる。母はりっぱな毛皮の上着を作ってやり、バターパンとおかしをもたせて、森へ行かせる。実子は小人に不親切をしたおかげで、小人ののろいを受ける。継母はいっそう腹を立て、糸をすぐようにと継子を凍った川に行かせた。そこで継子は王様と出会い結婚する。一

年後出産をする。それを知った継母は実子を連れて城に継子を訪問し、継子を川に投げ込み、継子を実子に入れ替える。しかし悪巧みが発覚し、継母と実子は処罰される。

この物語は、小人から祝福または呪いをうける物語の前半と結婚後の花嫁の入れ替えの物語の後半に分けることができる。物語の筋をつないでいるのは、継母である。継母の継子への憎しみからくる仕打ちと実子への溺愛による行為が、物語を進める。しかしむしろ前半は継子と実子が対比された物語であり、二人の性格と行動は対照的に描かれる。

すなわち、二人は、まったく正反対の性格と行動として表現され、その行為に応じて、超越的存在である小人から、祝福または呪いを授けられる。つまり、良い行ないには良い結果が、悪い行ないには悪い結果が、当然の報いとして与えられる。ここには、このような行為をするとこうなるのだという一つの民衆の思想あるいは信仰のようなものがうかがわれる。逆にまるでそれを具現化するために継子と実子という登場人物がいるようにもみえる。継子は、光の中にある善を表わし、実子は闇の中の悪を表わす。その違いが徹底的に表現され、それゆえ二人は明確に区別され、交じり合うところがない。

主人公の継子という視点からみた場合、実子は、主人公の比較の対象であり、徹底的に対比させることによって、主人公のすばらしさを際立たせ、印象づける役割を担っている。「ホレおばさん」は、それをいっそう強調した物語になっている。美しく働き者の継子は相応の報いとして「金におおわれて」、みにくくなまけものの実子は「どろどろのやにがくっついて」家に帰る。

このように対比される存在として、実子は描かれているが、継子との関係はどうだろうか。物語の中で、姉妹の関係が述べられているのは、唯一継子の姉の口から金貨が落ちるのを見て、実子の妹がうらやましがって、自分も森へ出かけていき苺を探そうとした点である。姉に対するうらやみの感情が表現されており、それ以外の関係は触れられていない。他の物語でも、実子は継子の前掛けがほしくてねたましくなったり（「恋人ローラント」）、妹の幸運をねたんで腹をたてる（「白いはなよめと黒いはなよめ」）、継子が妃になったのを実子

が母親をせめたてる（「兄さんと妹」）など、そこにあるのは「うらやみとねたみ」である。つまり、この感情によって、実子と継子の運命の明暗が分かれる。それほど、この感情は人の心に破壊的な負の影響を及ぼす。

さて、母親の感情も妹の感情に連動していることがわかる。実子は森に行くことをせがんできかないので、しかたなく母は過保護と思えるほどの支度をさせて森に行かせる。継子の結婚後、継母は継子への積極的な迫害行為を行なう。これは、「ホレおばさん」の母親のように「娘にも同じ幸運を得させてやりたい」という実子への愛情と同時に、他の話のように娘からの積極的な訴えはないものの、実子の感情を先取りした行為でもある。

このように実子と継母の感情と行動は密接に結びつき、二人の分かれ難い関係が表現されている。「白いはなよめと、黒いはなよめ」では、継母と実子の区別なく、不親切な二人の行為の報いとして神は二人を呪い、いっそうみにくくなった二人は、親切の報いとしていっそう美しくなった継子をいじめる。継母と実子の親子関係は、母子一体、あるいは母子密着の状態であり、子どもは母親に要求し、母親は子どもの要求をかなえるためには殺しも辞さない。

グリムメルヘンの継母、継子、実子の三者関係をみてみると、継母と実子の関係は、二人の区別がつかないほど結びついた状態であるが、継子と実子の関係は、実子にとって継子はうらやむ対象でしかなく、二人の間に交流がない。母親と一緒に継子をいじめるという行為はあっても、母親から独立して、継子と関わるという関係はないのである。この三者の関係の距離を考えると、継母と実子はきわめて近い距離にいて、この二人と継子との距離はきわめて遠い距離にある。

このような関係の中で、主人公の継子は、継母からのいいつけられた仕事を行ない、最後に王と結婚し妃となる。一方、実子は、継子をうらやみ、母にせがみ、最後は母とともに処罰され殺される。実子の登場する物語はこのような物語の筋になることが多く、そこに、主人公の継子のようにであれば幸せになり、実子のようにであれば不幸になるというメッセージを読み取ることができる。

それでは、どうすれば、継子のように幸せになれるのか、あるいは実子のよ

うな不幸なことにならないですむのだろうか。日本昔話「米ぶき・粟ぶき」から考えてみたい。

V、継母で表わされる母娘の関係

この話では初めから主人公の母は継母として登場する。継母と継子の二人の関係は、グリムメルヘンで見た関係と大きくは変わらない。

主人公にとって、継母とはどのような存在なのだろうか。ビルクホイザー-オエリ (Birkhäuser-Oeri, S., 1976) は、女性の個性化の道程を描いたグリムメルヘンで、継母にいじめられる娘のモチーフが出てくるものが多いことをあげ、個性化へと定められた女性はこの暗い母の像と対決しなければならないことを意味すると述べる。そして、「暗い継母が、非常に多くの場合、個性化のそもそものもたらし手だ」と言う。すなわち、継母が、「個性化へ駆り立て」、「娘に成長の道に赴くことを余儀なくさせる。そしてこの道は、最後には、こうした女性がよりよく理解して、正しく身を処することのできるようにする」と締めくくる。

また、河合 (1982) も、継母という存在について、「継母に苦しめられて後に、幸福な結婚をする女性の主人公の姿は、(中略)母性の否定的側面を体験してこそ自立に至れることを示している。」と説明する。

昔話に登場する継母は、日本昔話でもグリムメルヘンでも、継子をいじめ、迫害し、殺そうとする否定的な母親像を表現する。物語では主人公は否定的な継母の迫害に打ち勝って最後は幸せになる。この一見否定的に見える継母が、河合やビルクホイザー-オエリの言うように、個人をいやおうなしに成長へ促していく。その意味で、継母とは、成長への促し手である。そのように考えるなら、継母で表現される否定的母親像は、個人の成長にとって必要な存在なのである。

では、継母と継娘との関係はどのようなものであろうか。河合 (1982) は「継母・娘関係で表わされるのは、母娘結合が以前のように一体でなく、娘が母親

の否定的な面を意識していることを示す」と述べる。河合のいう母娘結合の一体とは、ノイマン (Neumann, E., 1953) の女性の意識の発達の「原初の段階」、すなわち母親と結びついた自己保存の段階を示す。そしてこの時期の母親は良い母として現れるという。しかし、次の段階である「父権的ウロボロスの侵入」の段階においては、母親との敵対関係が生じるという。継母と対峙しなければならない継子は、この段階にあると考えることができる。

父権的ウロボロスの侵入の段階とは、男性神であるハデスが、母デーメーテルのもとから、娘のペルセポネを奪い去るギリシア神話のデーメーテル＝ペルセポネの物語によって象徴的に表現される (河合、1982)。

河合 (1982) は、この段階をウロボロスの父性と呼び父性を強調する。そして、母・娘結合を破るためには、男性の侵入が必要であると述べる。個人の心において、そのような父性の存在を受け止めたとき、母・娘結合の段階から父・娘結合の段階へと変化すると説明する。

ノイマンによると、この段階は、内的には次のように体験されるという。「父権的ウロボロスの侵入とともに女性的なものには未知の圧倒的な力にとらえられるのであるが、この力は聖性として体験される」。また、「個人の人格領域のなかに、突然、超個人的な内容を持った無意識の内的諸力が入り込んでくる。無意識の力は、侵入し征服するということから、男性的なものとして体験される」。

この物語では、河合やノイマンの述べる神話のような侵入する男性 (父性) は登場しない。しかし、この主人公は良き母の存在する母子一体の世界を剥奪され、いやおうなしに個性化へと歩み出しているのは確かである。織田 (1993) も、母・娘結合の切断の在り方として母親の死による母娘分離があることを主張している。山口 (2009) はノイマンの発達段階について、「ノイマンは女性の個性化の第一歩を促すものとして父権的なウロボロスの侵入をあげているが、それより以前に、あるいはそれとは別に、『母の死』という形で、女性的な世界そのものの中から個性化への動きは始まっていると考えることもできる。」と述べているように、このような道筋をたどる個性化が存在するのでは

ないだろうか。

Ⅵ、母親の死から始まる個性化過程

この物語では、良い母を表わす母親の死については語られていないが、山口の指摘のように、母・娘結合の次の段階が、異なる有り様で描かれていると考えることができる。母親の死とは、突然しかも有無をいわず、母と娘の結びつきを破るものである。娘からすれば、一体化していた母親をもぎ取られ、よるべくなく1人取り残された状態と考えることができる。

母親を亡くす体験は、ある意味、ノイマンの語る内的体験と通ずるものがあると思われる。ここでは、母・娘結合の分離を、ウロボロスの父性の侵入としてでなく、良い母親の死として体験するのではないだろうか。母親を亡くす体験は、娘からすれば、母親を奪い取られる体験である。娘から母親が奪われることは、娘の視点と母親の視点という違いがあるにせよ、母親から娘が奪われるギリシア神話と同様、相当な衝撃である。この衝撃は、ノイマンの語る衝撃と同じであると言う事ができるのではないだろうか。そして、この段階に入ると、自己保存から自己を放棄する段階となるとノイマンは言う。しかし、ここで言う自己放棄とは、男性性との関わりで言う自己放棄ではない。

フォン・フランツ (Von Franz, M.-L., 1977) は、母親の死とは、母親との同一性を放棄しなければならないことの象徴表現であり、個性化過程の開始であると述べる。さらに、フォン・フランツは自己の本質を発見するため、あらゆる困難を引き受けなければならないと述べる。

ここに悪い母である継母が登場する。継母は、継子に、破れ袋を持たせ、栗拾いに行かせる。そして、栗をゆでて継子には虫食い栗ばかりをやる。また、祭りに行くときには目籠で据風呂に水を汲んで、栗十石搗いておくことを言いつける。

それに対して、継子は、継母の言いつけに従う。それはすべての継子物語の継子に共通した行動である。このような態度を、女性的態度にふさわしい受動

的忍耐 (Birkhäuser-Oeri,1977)、あるいは日本人の男女共通の生き方のパターンとしての受動的な耐える姿 (河合、1982) と考えることができる。河合は別の物語の継子に対して、立ち帰るべき「母なる国」をもたない女性にできることは耐えることしかないと述べる。母のもとに帰るとは、この場合母のいる世界であるあちらの世界に行くことであり、それは死ぬことを意味する。それゆえ継子は生きていくためには継母のもとで耐えるしかない。しかし、筆者はこの受動的耐える姿を後ろ向きの消極的な受け身の態度ではなく、前に進むための積極的な受容ととらえたい。なぜなら、困ったり途方に暮れたりしながらも、その課題にまっすぐに取り組むからである。そこには、亡き母への執着も、継母への恨みや不平もない。与えられた難題に対して前向きに取り組む姿は課題解決の道を開く。他者に対する態度もそうである。他者の言う事を素直に受け入れる態度は、同様に新しい道を開く。山姥の言う事、隣りの娘の言う事、継子は継母のみならず、実子である妹を含めて出会う人物の言う事をすべて素直にきいている。最後の嫁にほしいと望まれる結婚に至るまで迷いなくすべてを受け入れる。この積極的受容という態度は、関わる人物を援助者に変化させていくのかもしれない。ビルクホイザー - オエリ (Birkhäuser-Oeri,1977) は「苦悩が最大に達する時、しばしば救済的なアニムスが登場するのである。」と述べる。ここでは、援助者はアニムスという男性像に限らず、女性、動物までも援助者になるのだ。類話では、実の母親でさえ、継子を助けるために、あちらの世界からこちらの世界に現れる。

ここで言う自己放棄とは、私という主体性、すなわち我を捨てることではないだろうか。主体性をなくし、無になることによって初めてこのような態度が可能となり、課題を成し遂げることができた。ビルクホイザー - オエリ (Birkhäuser-Oeri,1977) は、家から追いだす悪しき継母をもつ人々を、より大きい意識をもつべく定められた人々と呼ぶ。個性化を「より大きい意識」をもつことであるととらえるなら、我を持つことは自分の立場から物を見る見方であり、それは狭い意識をもつことになる。そのため大きい意識を持つためには妨害的にしか働かない。自己放棄することによってしか、大きい意識は得られないのである。

我を亡くすこと、主体性を放棄すること、そこから大きい意識という新しい意識が生まれるのではないだろうか。大きな意識を通して、物事を見ることによって、解決できそうもない問題を解決していけるのではないだろうか。大きな意識を持つことによって、今までの狭い意識では否定的にしかみることができなかった出来事や人物が肯定的なもの、助け手として現れるのではないだろうか。

Ⅶ、実子と継子の関係

さて、この物語の中で最も興味深い登場人物が、妹の栗ぶきである。彼女は継母の実子であるが、その性格が継子物語に登場する一般的な実子に比べて、きわめてユニークである。この実子の特徴は、日本の継母物語に登場するいくつかの実子にも共通するが、グリムメルヘンの実子には決して見当たらないものである。

特に前半の物語（前半のタイプ）で、その特徴は際立っている。栗のたまらない姉に、穴のあいている袋を山のお堂にいる爺に繕ってもらうようにすすめたり、家に帰って虫食いの栗ばかりやる継母のすきを見て、姉に良い栗をころがす。栗ぶきは姉のことを思いやり、継母にいじめられる姉を助ける。

Ⅳ章で述べたように、グリムメルヘンの実子は、継母と一緒にあって継子をいじめることはあっても、それ以外の継子である姉と実子である妹との関わりは描かれていない。まして、この物語のように継子を助ける実子はいない。実子はあくまで継子と対比される人物として表現され、二人が関わるエピソードはない。このような二人の関係や交流が述べられるストーリーは、他の日本の継子話にもあり、これは日本昔話の特徴と言ってもよい。つまり、グリムメルヘンでの継子と実子の関係は無関係、あるいは関係が良くないのに対し、日本の昔話では二人の交流があり、そこにはしばしば良い関係が描かれているのである。

二人の交流のある関係は、山姥の家での話でも、また、後半の物語（後半のタイプ）でも描かれている。多くの類話が、継子が山姥のところに泊まった後、

実子が山姥のところに出かける継時的なエピソードとなるのに対し、ここでは二人と一緒に山姥のところ泊まるという同時的なエピソードとなる。そこで山姥からの言いつけに対して二人の行動は違ったものであったが、山姥の家で一晩過ごし、追手から必死で逃げるということは二人の共有体験になっている。ここでは、二人は一体となって行動している。また、祭りで、姉が妹にまんじゅうを投げて、それをもらった妹が姉だと気づくなど、そこには、お互いの結びつきがうかがわれる。

継子と継母の関係のみを取り上げると、その関係の在り方は、グリムと日本において大きく変わらないが、継子と実子を見た場合、この二人の関係性はかなり異なることがわかる。グリムでは継子と実子是对比されるための存在であり、二人の関係は無関係であるのに対して、日本ではこのような関係が芽生え、交流が生じることこそ、日本の昔話の、ひいては日本人の心の在り方の特徴ではないかと思われる。

さて、この関係性は、主に、実子が継子に働きかけ、それに継子が応じる形で、生じている。そこには実子の継子へ積極的な関わりがあることがわかる。困ったり途方に暮れる継子の行動は一見無力で主体性のないように見えるのと対照的に、その姉にこうしたらよいと助言したり、母のすきをみて姉に良い栗をあげる実子の行動は、きわめて行動的で主体的である。グリムの「三人の小人」の自分の事しか考えない利己的な実子に比べて、粟ぶきは姉への愛情、思いやりを持っている。そこには姉への思慕すらうかがわれる。

山姥の言いつけである「しらみをとる」という課題に対して、粟ぶきは恐ろしがってとることができない。これは関のあげている前半のタイプのモチーフ3と同様である。しかし、それに対する山姥の対応が、前半のタイプのモチーフ4と異なっている。ここが、他の類話にはないこの物語を特徴づける点である。すなわち、モチーフ4では、実子には言いつけのできなかつた相応のもの、または継子と対比されるものである「蛙その他の汚い物の入った葛籠」を与えられるが、ここで与えられるのは「豆炒り」である。そして、この粟ぶきのもらった物が、追いかけてくる追手から二人が逃げるのに役立つのである。この「豆

入り」はいわゆる呪的逃走の呪物である。この話では、継子実子の関係を超えて、二人の姉妹が力を合わせて困難を切り抜けていくことが強調される。

ここでの粟ぶきは、実子として対比される人物でなく、継子を助ける人物であり、その援助者としての粟ぶきに、「豆炒り」という貴重なものが与えられたと考えられる。ここでの二人の関係は仲の良い姉妹であり、しかも、実子の粟ぶきが、積極的に姉と関わり姉を助けている。ここでは、継子と実子の距離の近さが述べられており、実子と継母の関係は、グリムのそれよりはるかに距離があいている。継子と実子と継母の三者関係がこのような関係であるとき、すなわち、実子が継母との母子関係に少し距離を置き、母と異なる価値観を持ち、姉との関係を育むことができるとき、ストーリーは異なる展開を見せるのではないかと思われる。

祭りの出来事では、継母と実子の二人が祭りに行き、継子は一人残される。グリムのそれと近い三者関係が描かれている一方、姉妹のまんじゅうのやり取りには二人の関係の近さ、交流が表わされている。しかし、その後、主人公の結婚話が生じる。ここから、この三人の関係の変化は、決定的となり、グリムのそれと同じになる。米ぶきは山姥のもらった宝箱から花嫁衣装を着て嫁に行き、粟ぶきと継母はうらやましく思い、二人は田に落ちて、うらつぶ(貝)となって水に沈んだ。

山口(2009)は実子の粟ぶきのこの結末を「再び現れた試練のときに、彼女は羨望でいっぱいになってしまい、影の力に飲み込まれてしまう。」と述べている。姉のように嫁に行きたいといううらやむ心は、山口の指摘のとおり、羨望ととらえることができ、この感情はグリムの実子の感情と同じである。それゆえ、グリム同様に相応の結果が実子と継母に与えられる。しかし、グリムの実子もっていた継子を陥れるほどの強い妬みからくる罰でなく、まさに母のもと(無意識)に戻るという結末であり、両者の羨望の強さに応じた結末の違いがある。これらの物語は羨望という感情が人の心に破滅的に働くことを教えてくれる。

Ⅷ、実子の個性化過程

さて、筆者は、栗ぶきの心に生じた「うらやましく思う」気持ちについても少し考えてみたい。これを「羨望」の一言で片づけるのは、それまでの彼女の行動を考えるとあまりに理不尽な対価である。羨望とは、クライン (Klein, M., 1957) によると「自分以外の人が何か望ましいものをわがものとしていて、それを楽しんでいることへの怒りの感情であり一羨望による衝動は、それを奪いとるか、そこなってしまうことにある」という。たしかに、グリムの実子が継母と一緒に、継子の手に入れた幸せに対して、妬んで憎しみのあまり継子を亡き者にして自分がその代わりになろうと企む行為は、「羨望」にほかならない。しかし、栗ぶきの場合はどうだろうか。たしかに、栗ぶきは嫁に行く姉をみて、自分も嫁に行きたいとうらやましがった。しかし、そこにある感情は羨望から生じた姉の幸せを損ないたいという妬みや憎しみではない。それは、自分も姉のようにになりたいという同一視の感情である。そこには姉への思慕、すなわち愛情があると筆者は考える。それゆえ物語に見られるように栗ぶきは積極的に姉に関わり続けたのである。栗ぶきが姉を助けることができたのは、栗ぶきのまなざしが常に米ぶきに向いているからこそである。栗ぶきは慕う姉のためなら勇気を出すことができる。だから山姥の家でしらみをとるという自分のために行なう課題は怖くてできなかったのに、姉とともに逃げるためには、栗ぶきは山姥からもらった豆炒りを追手に投げつけることができたのである。

姉を慕う気持ちの強い栗ぶきに対して、米ぶきの妹への気持ちはどうだろうか。祭りでまんじゅうを妹に投げてやるという行為は、米ぶきの栗ぶきを慈しむ気持ちと理解してよいものの、それ以外は消極的な関わりである。最後の嫁入りの話では、米ぶきは1人家を出て、自分の道を進んでいく。この米ぶきの姿は、継母と妹からすっぱりと関係を切った有り様である。その切り方は見事な程鮮やかである。そこには妹への未練や情は微塵も見られない。個性化とはかように厳しいものかもしれない。

さて、栗ぶきは、姉への思慕を断ち切れ、後に残される。妹からすれば、

姉の行為はあまりにつれないものと感じられたのではないだろうか。その感情は「姉のようにになりたい」という思いとなって、「嫁に行きたい」となったと考えられるのである。継母は、実子の粟ぶきを嫁にもらってほしいと頼むがそれ以上の迫害を継子に及ぼすことはしない。しかし、実子を愛する気持ちはすべての継母に共通する。最後に継母が実子を白に乗せて田の畔をひっぱっていったのは、親子して、自分の道を行く継子のあとを追っていかうとしたのではないだろうか。そこには、継母の実子の思いをなんとか実現してやりたいという切ない母の愛がうかがわれる。

実子の粟ぶきのしようとしたことは、一つの自立、ひいては個性化の在り方と考えることができないだろうか。すなわち、良い母親のいる実子には一人でその母から離れることはできない。粟ぶきは姉を助けるという行為を通して、姉と一緒にすることで姉の自立する力を借りて、母親から離れ、自分の道、個性化を歩もうとした。ところが、姉は嫁に行き、自分の道を一人で進んでいった。自立半ばで一人残された粟ぶきに、良い母が登場する。母と距離のある関係は、再び一体化し、粟ぶきに芽生えた意識は大いなる母の無意識に沈んだ。

この物語に登場する継母は、実子をかわいがり、継子をいじめるといった典型的な継母の性質を持っているが、継子を殺そうと企てるほど脅威的な継母ではない。継母の継子への迫害がもっと凄まじい時、三者の関係は変化し、実子は母親と離れ継子とともに自分の道を進むことができる。

昔話「お月お星」（関、1956）はそのような関係が語られる物語である。これを取り上げて、実子の自立、個性化について考えたい。

継母は姉の継子のお月が憎くてたまらなかったが、実子のお星は姉思いの気立ての優しい娘である。父親の留守の間、継母は姉を殺そうとするが、その度ごとにお星がお月を救い、難を逃れる。業を煮やした継母は石の唐櫃を作らせて、そこにお月を入れて山に捨てようとする。それを聞いたお星は石切りに頼んで、底に小さな穴を空けてもらう。お月が捨てられるときに、菜種を少しずつ穴からこぼすように、そして菜種の花が咲くころになったら、それを目印に必ず助けに行くとお星はお月に伝える。春になり菜種の花を目印にお星はお月

を助けに行った。埋められていた石の唐櫃を掘り、お月と再会した。家には帰れないと二人は思案にあまって泣いていたら、殿様の行列が通りかかり、妹からわけをきいた殿様がかわいそうに思って二人を館に連れていった。その後、探しに来た父親と再会し、殿様は親子三人を館で大事に暮らさせたという。

この話では、継母の継子への迫害は執拗に繰り返され、そのたびに実子のお星は継子を助ける。継母の迫害は継子を殺すことを目的にしており、「米ぶき粟ぶき」の継母よりはるかに脅威的である。それと対抗するかのように、お星は「米ぶき粟ぶき」の実子より積極的、行動的であり、しかも知恵に富んでいる。そしてこの物語では実子を中心に展開するといつてよいほど実子が活躍している。

この物語に登場する実子は、「米ぶき粟ぶき」の粟ぶきを超えてさらにその先の成長する姿をみせてくれる。すなわち、お星は、粟ぶきが試み失敗に終わった母親からの分離を見事に成し遂げたのである。それは、母親の凄まじさに対抗するためのものであったかもしれないが、継子を助けるということを徹底的に貫いて得られた母からの分離である。

それでは、粟ぶきとお星のどこが異なっていたのか、その違いが母親との関係に見られる。粟ぶきは母親と二人の関係では、母親の言うことを素直に信じ、母親の行為を受け入れるという依存関係にあった。ところがお星は、同様に依存関係を求めてくる母親に対して、それを素直に受け入れる振りをする。この時の母親への関わりが絶妙である。母親の企みを聞いて、すぐに直接反対したり反抗するのではない。母親の前では母親と関係をうまく保ちつつ、着々と継子を助ける算段をする。そこには、母親との関係において、母親の依存への誘惑に影響されない、しなやかな強かさをもつお星がいる。それを持つことができるのは確固とした姉への愛情であると思う。

この物語からもわかるように、実子は継子を助けるという行為を通して、母から離れ、継子とともに幸せになる一つの自立、個性化の道が存在する。

Ⅹ、終わりに

継子は実の母親を亡くすというどうしようもない出来事によって、母親との依存関係を断たれ、いやおうなしに自分の道を進んでいく。一方、実子は母親との依存関係に留まるがために、実子個人としての成長は見られず、グリムメルヘンに示されるように、不幸な結末となる。しかし、ここで取り上げた日本の昔話に示されるように、継子との関係の有り様によっては幸福な結末となる。グリムメルヘンと日本の昔話の両者から言えることは、娘が自らの個を育むためには、実子と継母との関係に示されるような母子一体の関係の中に留まっていけないということである。このような母子関係の中にいるとき、その関係は楽園で居心地はよいが、継子で表わされる外の世界にいる他者は妬みと憎しみの対象でしかなく、結果、羨望の衝動で、自らを破滅するしかない。この破滅から逃れるために、母親の元に留まりたい欲求を断ちきり、母親から離れ、継子である姉を助けることを通して、自分の道を見つけていかなければならない。すなわち、継子で象徴される他者との関係性に開かれていくとき、破滅はない別の道が開かれていくのではないだろうか。

継子話「米ぶき粟ぶき」は実子の成長可能性を描いた物語である。継子同様、実子においても形は違うが自らの成長の道、個性化を歩むことができる。そのようなことをこの昔話は教えてくれるのである。

註1：高橋健二訳（1976）『グリム童話全集ⅠⅡⅢ』（小学館）を基とした。

文献

Birkhäuser-Oeri, S. (1976) "Die Mutter im Märchen" Verlag Adolf Bonz 氏

原寛訳（1985）『おとぎ話における母』人文書院

稲田浩二（1988）『演習版・日本昔話タイプ・インデックス』同朋社

稲田浩二ほか編（1994）『〔縮刷版〕日本昔話事典』弘文堂

河合隼雄（1982）『昔話と日本人の心』岩波書店

- Klein, M. (1975) "The Writings of Melanie Klein III" The Hogarth Press 小此木啓吾・西園昌久・岩崎徹也・牛島定信監修 (1996) 『メラニー・クライン著作集 5』 誠信書房
- Lüthi, M. (1975) "Das Volksmärchen als Dichtung—Ästhetik und Anthropologie" Eugen Diederichs Verlag 小澤俊夫訳 (1985) 『昔話 その美学と人間像』 岩波書店
- Neumann, E. (1953) "Zur Psychologie des Weiblichen" Rascher&Cie. 松代洋一・鎌田輝男訳 (1980) 『女性の深層』 紀伊國屋書店
- 織田尚生 (1993) 『昔話と夢分析—自分を生きる女性たち—』 創元社
- 関敬吾編 (1956) 『桃太郎・舌きり雀・花さか爺—日本の昔ばなし (II) —』 岩波書店
- 関敬吾編 (1957) 『一寸法師・さるかに合戦・浦島太郎—日本の昔ばなし (III) —』 岩波書店
- 関敬吾 (1978) 『日本昔話大成第5巻 本格昔話四』 角川書店
- Von Franz, M.-L. (1977) "Das Weibliche im Märchen" Bonz Verlag 秋山さと子・野村美紀子訳 『メルヘンと女性心理』 海鳴社
- 山口素子 (2009) 『山姥、山を降りる—現代に棲まう昔話—』 新曜社

